



古志原っ子運動会より

6月6日(土)、好天のもと古志原っ子運動会を実施しました。

今年度は体育主任を中心とした体育部の検討を深め、いくつかの変更を行いました。

色別パフォーマンスではBGMをなくし、こども達の声と動きだけで行うこと、そして1年生から6年生までが一緒に集まり学年ごとに動きや声出しの分担があるという「応援合戦」に今までとやり方を変えたものを実施しました。また、選択種目を増やし、各学年の種目については、走ることを増やす種目の検討を進めました。また各色担当主任の先生から「運動会通信」が出て、色別に頑張っているところ、準備の進捗状況を職員間で共有するなど、新たな取組がたくさんみられました。



開会式では「6年生を中心に全校でこの運動会にむけてがんばってきたこと。今年は50周年という記念の年の運動会であること。1から6年生までがみんなで団結し、全力で楽しむ気持ちは50年前から変わらないと思う。

今日は伝統を受け継ぎつつ、新しい歴史をみんなでつくりあげ、最高の運動会にしよう！」と児童代表から素晴らしいあいさつがありました。その後、選手宣誓がありました。リーダー皆、本気の声を出し、全力で取り組むという決意がしっかりと表れ、ここにも古志原小学校の新しい伝統のスタートを感じました。

今年度は古志原小学校50周年の年ということでもあり、PTA50周年実行委員会より、横断幕をつくっていただき、それを掲示しながら運動会を行いました。

各学年とも工夫ある種目で、一生懸命に走ったり、応援をしたりしてとても元気な声が出て盛り上がりました。色別選択種目の「玉入れ」「綱引き」「リレー」では、出場する選手だけでなく、応援するこども達が、それぞれのテントからしっかりと声を出して、精いっぱい気持ちと態度で盛り上げることができました。

種目ごとに得点が付きましたが、それ以上にこどもたちからは「やり切った」という表情が見え、充実した気持ちになった運動会でした。

この運動会において、こども達は当日だけではなく、準備段階から6年生を中心に綿密に準備を進めてきました。その計画にそいながら各学年ごとに、朝から応援合戦の声をしっかりと出したり、学年別種目練習では練習から本番のような気持ちと態度で取り組んだりすることができました。全校のこども達が、気持ちを揃えて、大きな目標に向かっていくという古志原っ子たちの大きな流れ、一体感、そして成長があった運動会だったと思います。

本校運動会ではテント16張りが出ます。大量のテント準備となりますが、PTA執行部の役員の方を中心として、たくさんの保護者さんの協力を得ながら進めることができました。また、1週間前の校庭整備、前日の準備、当日の準備片付けにもご協力いただき、大規模運営の中でも大変スムーズに運営することができました。お手伝いいただいた皆様に感謝申し上げます。

こどもたち、保護者の皆さん、地域の皆さんで一体となり取り組むことができた運動会であり、こどもたちの自主的な取組を多くの方で支え、成長を見守ることができた運動会だったと思います。ありがとうございました。



～子育てに思うこと～ある父娘の話より

こどもがやり続けるということを自分自身で決め、そこでがんばっている姿を認め励まし応援しながら、こどもたちのやる気、自己肯定感を高めていきたいです。

前回(5月号)の古志原小だよりに大事にしたいことのひとつとして、このように考えているということをお伝えしました。このことについて、以下、その背景にある思いについて、少し述べさせていただきます。

私の友人のお嬢さんが、高校を卒業され、無事進学を決められました。その話が聞こえてきたので、これはお祝いをと思い、連絡をとったところ父親である友人は喜びというより憂いげのぞき見える表情。どうしたのかと尋ねてみると「娘は合格した大学への入学の権利を放棄するらしい。地元の大学に行ってくれると思って喜んでいただけ、本当にやりたいことがあるので、それを叶えるためにもう一度受験をさせてほしいと言ってきた」とのこと。お嬢さんは、厳しい受験環境の中で、ひょっとしたら自分の夢より少し妥協したところに向かったことを悔やんでいるのではなどと、私はお嬢さんの胸中に思いを巡らせました。友人に「どうする?」と聞くと、「親がそうしろと言ったのではなく、娘が覚悟をもって本気でそうしたいと言ってるんだ。応援するしかないだろう」と答えてくれました。

それからお嬢さんは、親元を離れ、自宅から距離にして400km以上の他県にある学習施設の寮に入り勉強することとなりました。2畳に満たないスペースにベッドと机があるだけの小さな部屋で、1日中学習に向かい、平日休日もない毎日。ほぼ1年間、勉強のためだけの生活となりました。故郷島根に帰ってこられるのは、お盆の中の2日間だけ。携帯電話も寮に預けて、家族と連絡をとる術もない過酷な環境に自ら身を置き目標に向かってがんばられたようです。その間、父親はというと、今頃あの子はどうしているのかな、寂しくないかなと心配で心配で、しょっちゅう娘が夢に出てきたそうです。連絡が取れない中、少しでも娘が息抜きが出来るようにと誕生日、クリスマスなどにはプレゼントを郵送し、直接手助け出来ずとも、頑張っている娘に応援の気持ちを届けていたそうです。

明けて入学試験終了後。その結果は・・・お嬢さんは希望していたような結果を残念ながら出ることができなかったそうです。それでもお嬢さんは父親に「自分の持っているもの、全部出し切った。応援してくれてありがとう。挑戦させてくれてありがとう」と満足げにそして晴れ晴れした表情、笑顔で言ってくれたそうです。父親は涙が止まらなかったと・・・。

その後、お嬢さんはさらなる目標に向かって励み、現在は自立と社会参加を果たし、元気に充実した日々を過ごしておられるそうです。

親としてこどもに期待をして、たくさんのこと望み願うことは当然のことと思います。しかし時にそれが行き過ぎたり、親のエゴだったりして、こどもを苦しめる結果になることもありそうです。

このエピソードのなかでは、結果はさておき、お嬢さんが自分で決めたことに本気で覚悟をもって取り組んだこと(自己決定)、そしてそれを見守る家族の愛(理解)が、最後「自分を全部出し切った」と言い切れるお嬢さんの笑顔(自己実現)につながったと思います。

自分で決めたことに本気で取り組み、自分を出し切ったと言い切れる経験をしたことは、これから生きていく中で、降りかかってくるであろう様々な困難を撥ね退ける強い力、そして自信をもってたくましく将来を切り開いていくための糧になると思います。

たまたまこの話は高校卒業後の進路選択のことではありましたが、スポーツ、芸術他、どんな分野でもあてはまることと思います。

子育ての目標はこどもの「自立と社会参加」にあります。その実現のために、親として、胸締め付けられるような思い、こどもの取組を見守るしかできない、待つことしかできない苦しさなど、たくさん苦勞をすることがあると思います。しかし、大事なことは、言い尽くされた感に落ちますが、こどもが自分で決め、本気でやろうとしていることを「信じ、認め、励ます」～友人との話のなかでこのように思っているところです。